

野菜種苗等に関する情報交換会



講演や活発な議論が交わされた情報交換会

続いてのパネルディスカッション。最初にマイクを向けられた農業生産

苦勞するサイズ

「なぜ、料理人が高い国産の農産物を買わなければならないのか」「使う人の希望する野菜を作っている」「市場より大きいダイコンやニンジンがほしいが、産地には収穫する労働力がない」「市場では重量野菜はLとMしかはない」「野菜にはストーリー性が必要」。市場経済の中にある野菜市場も一般の社会情勢と同じく、画一化と個性化の両極端な方向に進んでいる。どちらを選択しても「長一短」。儲かる農業の可能性はあるのだろうか。

「野菜種苗等に関する情報交換会」兼「第148回品種見本市」

野菜の「LとM」の悲劇

進む収穫物の画一化  
ストーリー性に別の道

青果育種研

農水省近畿農政局、青果育種研究会共催の近畿地域における「野菜種苗に関する情報交換会」兼「第148回品種見本市」は11月28日、大阪市中央区の大阪合同庁舎で開かれ、野菜の種から生産、加工、流通の各関係者、そして実需者までが約200人一堂に会した。種苗会社が持ち寄った来春のお薦め品種の見本市開催を前に講演会、パネルディスカッションが開か

れ、農業の現状から今後、農業の方向性について活発な議論が交わされた。

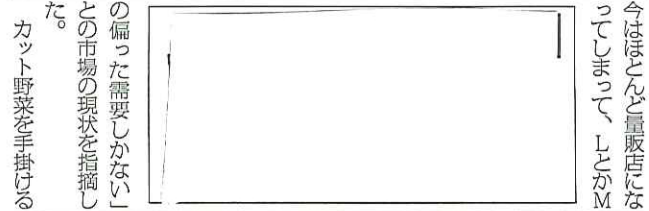
若者の価値観に変化

実需者の代表として講演した辻調理師学校企画部副部長の尾藤環氏は「学校には全国から売れる農産物、とか、売れる商品、へのアドバイスと協力を求める要望がきている。しかし、競争力のない日本の農業が資本経済理論だけをもち出し、では、衰微するしかない。それよりも消費者行動と土地を結びつけ、物語性と手間暇、という付加価値を付けていくことを提案した。その根拠として若者の社会貢献意識の高まりと大学農学部志願者数の増加で、今だけ、金だけ、自分だけ、という偏った自由経済の弊害に対して、若者の意識の変化を指摘する。



種苗メーカー17社の自信品種が並べられた会場では、参加者たちが来春播く種の吟味をしていた

つ。一振りする生長が止まるようなものはできませんか」と冗談を交えて、農家の抱えている深刻な現状を訴えた。種苗メーカーとしてもサイズ問題は育種で大変気になるところ。みかど協和の飯野芳治部長代理は「ニンジンは大きくなくても割れないといった在圃性はありますが、巨大化を止めることまでは解決できていない」と答えた。



今はほとんど量販店になってしまっ、LとかMの本純生専務取締役は「市場に出回るダイコンは1本1kgだが、3kgで契約している」といい、サイズの縛りを多少緩和しているとはいえず、やはりこの問題は避けて通れないとした。

リスク分散は可能か  
サイズ問題、外見問題と量販店向け商品はケタ違いの注文もあるが、リスクも大きい。そのリスクは誰が背負うのか、それとも多くに分散できるのか。豊作貧乏、不作でも貧乏になりがちな生産者のリスクを軽減することができるとの。

伸び続けるカット野菜

生産ラインの合理化が課題

菜 野 菜 研 究 所  
清 普 及

青果育種研究会は11月27日、兵庫県神戸市北区の清浄野菜普及研究所で「業務用野菜についての勉強会」を開き、種苗メーカー、市場関係者など

55人が参加した。業務用の野菜の消費の伸びの中でカット野菜の需要は増え続けている。しかし、需大勢の入場者に食事を提供するレストランにカット野菜を使うことで、人

清浄野菜普及研究所は1970年、大阪万博で「業務用野菜についての勉強会」を開き、種苗メーカー、市場関係者など

企業理念の「日々活菜」のもと、人と環境に優しい、安全でおいしいカット野菜の加工事業を展開している。ダイコン、レタス、キャベツ、タマネギ、ニンジンを始めとして、ハクサイ、ニラ、パプリカやカボチャ、サツマイモなど数十種類の野菜を千切り、薄切り、みじん切りなどにすることで650アイテムものカット野菜を生産している。主生産は刺身のつまに使う千切りしたダイコン。

主な納品先は量販店、外食産業や学校給食。これまでは納品先の要望に合わせて、野菜やカットの仕方を委ねてきたが、樽本純生専務は「今後はアイテム数を絞って、生産ラインを合理化する必要がある」と話していた。